

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Memories of professor Terunao Abe

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 篠田, 実紀, Shinoda, Miki メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1809

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



阿部晃直先生のこと

篠田実紀

隣の研究室が空室になって久しい。20年以上の間、2度の在外研究期間を除いて、隣人はいつでもそこにいた。ちょっとした質問があればすぐに私は隣室のドアをノック。忙しくても必ず何らかの答をくれた隣人は、今はもうそこにいない。私の神戸市外国語大学での生活に、大きな穴がぽっかり開いたようだ。

私が阿部先生の隣室に引っ越したのは、着任の翌年のことだ。私が着任した当時、まだ5名しかいなかった女性教員の研究室は、すべて3階にあった。か弱い女性の研究室はたとえエレベーターが止まっても階段で上り下りできる低層階に、あるいは、おしゃべり好きの女性教員の研究室は同じ階に、という、当時の研究所長のそれなりの配慮であったのかもしれない。しかし、3階には国際関係学科の教員はほとんどおらず、右も左も分からない私は、質問や疑問が出てくるたびに学科教員の多い6階に足を運ばなければならなかった。インターネットも電子メールもまだ大学に存在していなかった時代、内線電話だけで意思疎通をはかるには限界があったのだ。それに対して「そんな大奥みたいなところにいないで、6階に上がってきたら？」と提案してくださったのが、阿部先生だった。英語の先生の口から「大奥」という言葉が飛び出したのには面食らったが、ありがたくご提案を受け入れて、ちょうど空室だった隣室に翌年から移ることにした。その後、隣室に足繁く通うようになると程なく、阿部先生は剣道の心得があり、実は時代劇の大愛好家だということが判明し、この時の「大奥」発言も、なるほどと頷くことができたのである。

国際関係学科では、各教員の専門研究分野が大きく異なる。そのため、同じ学科に属して同じ専攻英語を担当し、しかも隣人同士であるとは言っても、社会言語学者の阿部先生とアメリカ文学を研究する私が自分の専門分野の話をすることはほとんどなかった。だから、この文章の中でも、阿部先生の輝かしい研究業績について、私が多くを語ることはできないということを、まずここでお断りしておこう。しかし、専門が全く異なるにもかかわらず、阿部先生は、私が着任して以来、最も多く言葉を交わし、最もお世話になった先生であったと思う。先生の周りには、私以外にも、常に多種多様な教員や学生が集っていたが、これはひとえに、先生のたぐいまれなバランス感覚と懐の深さのゆえであらう。

先生は、多様な価値観に対して開かれた国際性と、人情あふれる大和心を共存させた方である。年齢、性別、人種、社会的地位などの要素にとらわれることなく、あらゆる種類の人々に対して、人間対人間として分け隔てなく接する、という至難の業を、阿部先生は、いとも簡単にこなしておられた。下の立場の者にも常に敬意を払い、社会言語学の権威でありながら権威主義とは無縁の方で、多くの場面において謙虚な方であった。教員の間で学生のことを話すときは必ず「学生さん」と「さん」付けで話されていたことが印象に残っている。逆に、学生たちの間で阿部先生のことを話題にするとき、「あべちゃん」という親しみを込めた呼称が一般的だったということも、先生の親しみやすく人情にあふれたお人柄を証明するであろう。先生の謙虚さは、教授会の席でご退官の挨拶をされるときにも表れた。教授会では壁側の前列が阿部先生の指定席だったが、「こんなところからではおこがましいから」と、ご挨拶の時にはわざわざ出口近くまで移動してからお話しになったのである。

しかし、阿部先生は、決して「甘い」人ではなかった。授業や会議などの公の場では、むしろ「厳しい」人であった。英語・日本語に限らず、特に言葉の使い方に関しては慎重を極め、他人の発話や作文のみならず、ご自身の文章に対しても、高度な語法の正確さを求めておられた。「あべちゃん」といえば、前置詞や冠詞の「かっこ抜き」のテストを想起する学生は多いはずだ。先生の作成された文章には、語法的な誤りはほとんどなく、私も、重要書類を作成した時には、必ず提出前に阿部先生に目を通していただくようにしたものだ。

会議の場でも、阿部先生は、問題点や矛盾点があったら少ない言葉での確かな指摘をされ、時に勇み足気味になる雰囲気の中で、貴重なお目付役であった。先生のご指摘が、その場の思いつきや感情から発せられた発言ではなく、その時ご自身が置かれた立場への責任感から発せられ、慎重に熟慮を重ねた結果であるということは、大学全体の教員の多くが認めることであったはずだ。穏やかで控えめなトーンでゆっくりとした阿部先生の謙虚な語り口と、節約された言葉の中には、口角泡を飛ばして大声で叫んでも到底伝わらないような説得力があった。

先生は、卓越した言語システム転換能力の持ち主でもある。明確な論理性が求められる英語と含蓄や流れを重視する日本語の間では、システムをスイッチすることが極めて難しい。英語を使う感覚で日本語を使うと理屈っぽくなり、逆に日本語を使う感覚で英語を使うと感情的で論理性に欠けることが多くなる。ところが、阿部先生は、英語を使う時には英語らしく、日本語を使うときには日本語らしく、ということ徹底しておられた。先生が話されるブリティッシュ・イングリッシュの美しい響きは、英語を母国語とする人々も含

め、同僚や学生の間で誰もが認めるところであった。文章を書かせても、上述の通り阿部先生の英語にはほとんど文法的なミスがないばかりか、上品な言い回しをさりげなく使って読み手を引きつける英文を作成されていた。日本語の文章も同様で、先生の公の場でのご発言や先生が作成される公式文書には、敬語の使い方など、日本語の特性を生かした表現がふんだんに盛り込まれていた。

その一方で、徳島県ご出身の阿部先生がインフォーマルな場で話される日本語が、非常に柔らかくて親しみに満ちた関西弁であるということも事実である。実際、阿部先生の格調高いブリティッシュ・イングリッシュを聞いた後、飲み会などでの日本語を聞いてびっくりしたという経験をした者は少なくないだろう。部下や学生が感じる先生の親近感、この話し言葉にも因るところが多いが、その口調はどこか、先生が愛好される『水戸黄門』『暴れん坊将軍』などの時代劇の中で、ご老公や将軍が、身分を隠して庶民に接するとき発する優しく謙虚なオーラにも通じるところがあるように感じられる。権力があってもそれを武器として振りかざすのではなく、弱者の言い分にもしっかり耳を傾けようとする先生の配慮によって、困難な状況から救われた者は少なくないだろう。

これまで阿部先生の英語と日本語について述べてきたが、先生には、もう一つご堪能な言語があり、それは、ギリシャ語である。学生時代の留学と教授になられてからの在外研究で、阿部先生は二度に渡る長期滞在をされた。先生はイギリスにも同じように留学と在研の長期滞在をされたのであるが、面白いことに、先生のギリシャ滞在のお話とイギリス滞在のお話は、全くトーンが異なる。イギリスのことを話される時には、真面目な学問の話ばかりであるのと同様に、ギリシャの話をする時には生活一般の体験談や失敗談が多い。ご退官直前に先生が同僚や学生の前で二カ国への滞在についてお話をされたことがあったが、その時、イギリスでは勉強をして、ギリシャでは楽しんだと言っておられたのを覚えている。だから、ギリシャ語を話す時にはとにかく意思疎通ができたらいいと思って間違いをおそれずに話すことができるが、英語はそうはいかない、これで日々の糧を得ていることもあり、いい加減な話し方はできないということである。先生のプロ意識には頭が下がる思いであった。しかし、同時に底抜けに明るい地中海気質にもすっかりとけ込める柔軟さも持ち合わせた先生は、ここでも見事にバランスをとっておられると分かった。

ご退官後、阿部先生のお姿を当大学でほとんど見かけなくなり、さびしい限りである。他大学に勤めておられ、お忙しいかもしれないし、余暇は趣味の釣りや園芸に費やしておられるのかもしれない。謙虚な先生のことだから、遠慮

しておられるのかもしれない。国際関係学科の専攻英語教員のパイオニアとして数々の足跡を残された阿部先生、長い間ほんとうにありがとうございました。今後もますますお元気で、たまには外大に足を運んでください。